

## ダマスキオス『第一の諸始原についてのアポリアと解』

## 第I巻第4部 (R. I, 66-86)

堀 江 聡

## はじめに

プラトンによって創設されたアカデメイアの最後の学頭ダマスキオス(紀元後460年頃生れ, 538年以降没)<sup>(1)</sup>の主著『第一の諸始原についてのアポリアと解』の第I巻第4部 (R. I, 41-66)を以下に訳出する。底本には、ビュテ版<sup>(2)</sup>を用いたが、リュエル版<sup>(3)</sup>も参考にした。翻訳としては、上記ビュテ版の対訳の他、ガルベリヌの仏訳<sup>(4)</sup>を参照した。〈 〉内はギリシア語原文上の補足箇所、{ }内は、文意を掴むための訳者による補いである。改行および章分けは、ビュテ版のギリシア語テキストにしたがった。ギリシア語原文にはないが、ビュテ版訳者の章ごとの小見出しを採録し、各章の冒頭にゴチック体で附加した。さらに、[R + 数字]により、リュエル版のページを併記した。

---

(1) Ph. Hoffmann, *Damascius*, in: *Dictionnaire des philosophes antiques* II, éd. R. Goulet, Paris, 1994, pp. 541-563

(2) Damascius, *Traité des premiers principes. De l'ineffable et de l'un*, texte établi par L. G. Westerink et traduit par J. Combès, Paris: Les Belles Lettres, 1986<sup>2</sup>

(3) Damascius Successor, *Dubitaciones et solutiones de primis principiis, In Platonis Parmenidem*, pars prior, ed. C. Ae. Ruelle, Amsterdam, 1966 (Paris, 1889)

(4) Damascius, *Des premiers principes. Apories et résolutions*, Introduction, notes et traduction du grec par Marie-Claire Galpérine, Lagrasse, 1987

## [第4部：一と発出]

### [1. 一からの発出はあるのか]

[R66 承前]<sup>(5)</sup>以上の論に引き続き、かの一から、何であれ何かが、それに後続するものどもへと発出するのか、それとも、かの一は何ものも分与しないのかを探求するのが筋である。というのは、どちらにしても、正当にも人はアポリアを提起しうるであろうから。じっさい、もしそれから導出されたものどもに何ものも分与しないのであれば、いかにしてそれらを、その本性を少しも享受しないほどまでに似ないものとして導出したのであろうか。また、それらに分与しない己の本性のうえて、いかにしてそれらの原因なのだろうか。また、導出されたものどもは、いかにしてそれへと向きを変えて、いかなるしかたでも分有されず、分有不可能なものを欲するのであろうか。また、発出したものは自らの原因に根を張らずに、いかにして保持されうるのであろうか。

### [2. 発出擁護論]

『国家』篇においてソクラテスは、真理はかの一から発出し、可知的なものとし性的なものを結びつける、かの一の光であると言ってははいないだろうか。したがって、ソクラテスもまた、かの地から到来し分有され

---

(5) 拙訳「ダマスキオス『第一の諸始原についてのアポリアと解』第I巻第1部(R. I, 1-18)」は、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』34、2002年、153-177頁に、第I巻第2部(R. I, 18-30)は、『文部科学省科研費基盤研究(B)(1)「プラトン主義の伝統における継承と変容——思想の時代超越性と時代依存性の研究——」報告書』(代表者：小浜善信)2003年、53-62頁に、第I巻第2部(R. I, 30-41)は、『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』18、2003年、29-45頁に、第I巻第3部(R. I, 41-66)は、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』35、2003年、159-192頁にそれぞれ掲載されている。

るものを知っているわけである。だが、質料さえもかの一の最後の痕跡を獲得しているのであれば、質料に先行するものどもがまた、それぞれのものに存立に応じて、それぞれのものにふさわしく、かの一を多様に分有していることは当然である。しかしまた、徹底的に吟味すれば、それはあらゆるものにおいて明らかであろう。つまり、不可分なものも全体的なものも、可死的なものも永続的なものも、欠如的なもの<sup>(6)</sup>も形相的なものも、その各々は多であるのみならず、多に先立つ一である。分割に先立って、不可分なものがあり、分割されたものに先立って、統一化されたものがある。まさに各々のものの万物であるものは、万物に先立つ、万物の圧縮体であり、これこそわれわれが「統一化されたもの」と言い、「存在者」と呼んでいるものなのである。そして明らかに、統一化されたものに先立って、一に即してある“一・万物”があるのだが、それは、“存在者・万物”が統一化されたものに即してあるのと同様であり、限定のうちにある万物が分割されたものに即してあるのと同様である。したがって、どの全体のうちにも、万物に先立つものに類比的なものがある。そしてこれが、かの一の万物への発出なのである、つまり、それぞれの場合に一に即して先在する完全な存立、否むしろ、それぞれの存立の根なのである。

### [3. 発出否定論]

しかし、発出するとした場合、再び[R67]人はいかなるしかたで発出しようのかと疑問に思うであろう。というのも、何がその分離の原因となるのであろうか。なぜならじつに、発出はすべて分離を伴っているのであり、あらゆる分離の原因は多だからである。つまり、分離させるものはつねに、多数化するものであるが、かの一は多に先立つ一だか

---

(6) リュエル版によれば、στερητικῶνではなく、στερεῶνなので、「立体的なもの」という訳になる。

らである。もしかのものは、単独の一としての一にすら先立つのであれば、なおさらのこと多に先立つわけである。したがって、その本性は分離することが全くない。したがって、それは発出しない。そこで、万物はそれから別の本性へと発出するのであり、それ自身が導出したのであるが、他方、それ自身はいかなるものへも発出せず、自己自身から何ものに対しても、いかなるものをも分与することがない。というのは、分与されるものは、分与するものより劣っていて、分与するものそのものではなく、似ているものでなければならぬからである。そしてまた、それぞれのものにとって端的な尺度ではなく、或る尺度でなければならぬからである。だが、減退とか尺度とか、その類のものは、たとえいかなる他性も忍び込まないとしても、何らかの多のうちに、限定を伴って、同一のものの流出と転化に沿って認められるものである。しかし、かの本性はあらゆる反射——どんなしかたで多数化されているにせよ——に先立っている。なぜなら、多が始まったときにこそ、発出——形姿を同じくするにせよ、異にするにせよ——の余地も生ずるのであるから。したがって、かの一は全く発出しないものであり、万物のいかなるものに向けても自己自身から照明を放つことはない。というのもじっさい、照明は照明するものから分離するからである。

さてさらに、存在者——これをまさにわれわれは、統一化されたものと措定したのである——も発出することはありえないであろう。というのもじっさいプラトンが言うように、これもまた実有的分離に先立って聖なるものとして静止しており、不動だからである。なぜならたしかに、全面的に統一化されていて、いかなる点でも分離していない存在者は、静止しているのであるから、少なくとも自己を多の発出に向けて分離することはありえないからである。しかしまた、自己に先立つものども——いやしくも存在者<sup>(7)</sup>であるのだから——から「自己を分離することも」、ま

(7) ガルベリヌは写本上の根拠はないが、“des non-étants”と訳している。

してや自己の後のものどもから {自己を分離することも} ない。じっさい、いかにして第二のものが第一のものに対して、あるいは、原因づけられたものが原因に対して作用しうるだろうか。したがって、減退にせよ分割にせよ、どんな発出のしかたにせよ、存在者さえ他に向かって発出することはない。

「存在者を存在者への依存から切断しないであろうから」とパルメニデスは語っている。それゆえまた、かのパルメニデスは存在者は一ではないと述べたのである。したがって、いやしくも切断されることさえないのであれば、存在者が発出するとは人は言うことができないであろう。それゆえまた、ましてや一は発出しえないであろう。

さてさらに、発出のうちに、また個々のもののうちに生ずる一の尺度や痕跡は、他のものどもから発する別の [R.68] 発出によって付け加わる他の痕跡に先立つのであるが、それらは一が一から切り離されないように、互いと完全に一体になっているか(こうして、すべてが一になり、一そのもの以外の何ものでもなくなるだろう)、あるいは、何らかのしかたでお互いから分離しているかのいずれかである。そして {後者の場合}、いかなる原因もなく自動的にそうであるのか——これはまさに不合理である——、何らかの原因によってなのかのどちらかである。そこで {後者の場合}、一の後の多によってなのか(そして、発出は一に固有のものではなく、多に固有のものとなるだろう)、一によってなのか(して、どうして一が分離を引き起こすのか)、一に先立つ何かによってなのかのいずれかである。万物に先立つ“万物・一”と言われているものが、じつにそのようなものであるとわれわれはみなすが、われわれが述べたように、それはまさに万物に属する何ものでもなく、万物に先立つ万物であって、その発出をまたわれわれは探求しているのである。だが、かのものは分離させもしなければ、分離されもしない。なぜなら、多でもなく、多数化するものでもなく、また、一でもなく、統一化するものでもないからである。したがって、かの本性は万物を超えていることによって万

物なのだから、発出もしなければ、滞留するでもなく、還帰もしない。

以上に加え、もしかの本性の尺度が発出し、存在するものや生成するもののそれぞれのうちにあるのであれば、それぞれにふさわしいものを与えることは明らかである。そこで、もし可滅的なものや可死的なものに何も与えないのであれば、どうしてこれらの原因として褒め称えられようか。他方、与える場合でも、永遠的なものや永続的なものに与えるのとは同じものではない。したがって、それらに与えられるものは、可滅的・可死的なものである。して、一にいかなる消滅が生じえようか。いわんや、一ですらないもの、不滅であることすらできないものに、いかなる消滅が生じえようか。というのは、永続的なもの、そして永遠それ自身も一からはるかに離れているからである。それゆえに、また第一の存在者についても、同じアポリアがわれわれを待ち受けている。じっさい、これもまた永遠に先立つのであるから、永遠的なものにも先立つのであり、したがって、他のしかたで永続的なものには、なおさら先立つ。だから、可滅的なものからは最大限に離れているのである。したがって、可滅的なものの各々のうちにある、かの一の痕跡は、可滅的ではありえないであろう。だが、おそらくその痕跡も質料のような振舞いをするのであろう（というのも、それは他のものどもの下方にあり、いわば何らかの質料、あるいは質料そのものだからである。思うに一は質料そのものであるが、存在者は質料に先立つのである）。つまり、可能態においては、不滅と可滅の両者であるが、現実態においては、そのどちらでもない。しかし、われわれの論は下方に突進した一の痕跡についてではなく、質料や可能態においてあるすべてに先立ち、諸形相そのものとともにあるものについてである。じっさい明らかに、末端のものどもに先立って中間のものどもは、諸々の全体の一なる始原に与る。だから、それらは不滅なのだが、それら転化しないものまわりに、転化しながら、ときにより異なる可滅的な充溢体が生ずるのかもしれない[R69]。しかし、もしそうであるならば、分有は、これらのことを書く葦ペンとか、

これらのことが書かれる紙など個々のものに固有ではないことになる。だが、いやしくも始原から差異あるものどもとして発出したのであれば、何らかの固有の善に関係している。次に、可滅的なものであるかぎりの可滅的なものそれ自体は、かのもを分有するのであろうか、それとも分有しないのであろうか。確かに、もし後者であるならば、かのもは少なくとも可滅的なもの原因とはなりえないであろう。他方、前者であるならば、与えられるものも可滅的であろう。人は不滅のものについても同様に推論しうるであろう。しかし、おそらく分有は、諸々の全体のような永続的なものだけに属するのではないか。第一に、すでに述べられたように、かのものには永続的なものすら、少しもふさわしくない。第二に、それに由来するものうち、或るものは分有するが、別のものは分有しないという任意性はいったい何なのであろうか、しかも、それはあらゆる可滅のものも不滅のものも超えてあるというのに。

#### [4. 共通の分有の仮説]

すると、おそらく万物が一を分有するが、ちょうど太陽の光は可分の・物的なもので、たとえ全体としてではないにしても、同一のものとして万物のもとに生じるように、一の分有は一つ、かつ不可分で、万物に同じ分有が全体として臨在するのであろう。かの一は不可分なものも全体も超えているので、同一なものとしてすべてのものによって分有されるものもつともである。分離は分有されるものうちにはなく、下方の分有するものにおいてあるからである。じっさいプロティノスは、存在者をまたそのように、同一のものが全体として至るところに、万物に共通に、多の個々のものにも臨在していると考えのをよしとしている。しかし、存在者と一への万物の分有が一にして不可分だとしても(つまり、両者の {分有の} しかたは、類似のものだとしておこう)、それにもかかわらず、分有は原初的存在から発出し、分離したものである。

それでは、何が第一のものから第二のものを区別するであろうか。と

いうのは、一を一から区別することと、{|一に|} 続いてそのような区別をすることは何ら異ならないからである。というのも、かの本性は分離を拒否するからである。しかしおそらく、かの一の分有と原初的存在とは異なりさえしないのであろう。なぜなら、かの一は現にある自己自身以外の他のものを、分有するものに自己から与えることはないからである。あるいは、こういうことは質料、一般的に言って構成要素にふさわしいのではないか。というのは、これらもまた自己自身を、それらから成るものに与え、構成されたものの質料のごときものになるからである。だが、もし人が以上のことを{|構成要素に|} 認めないとしても、少なくとも質料は、自己の後に世界に与えうるものを何ももたないので、自らを与えるのである。否、質料は与えて、より劣ったものにするのだが、かの一は自らを万物にも個々のものにも与えて、おそらくより優れたものにするのである。もっとも、自己を質料のごときものとして与えるのではない。というのも [R70]、形相としてさえ与えるのではないからである。むしろ、第一原因の第一の分有として自己を与えるのである。こう言っても同じだが、多を分有したのであるかぎり、たとえ第一原因から発出しているとしても、分有するもののうちにあつて、それらから分離することを欲しない原初的存在として自己を与えるのである。

## [5. 区別の原因の仮定]

したがって、発出は第一原因からですらなく、多から産み出される。万物が一であるのも、さらにまた存在者であるのも、第一原因ゆえなのであるが、それはちょうど、枝と幹そのものの成長に先立って、それだけですでに木全体である根のようなものである。あるいは、無限の直線の乖離に先立って、そのうちに多くの直線のすべての末端が一に即して同時にある中心のようなものである。乖離は中心の後のことなのだが、中心が乖離の原因ではなく、連続的なものの一方向への流出がその原因なのである。というのは確かに、かの地でも多数化する原因が発出を開

始するからである。実有的な原因は実有的な発出を、単一的な原因は単一的な発出を開始するのである。

しかし、以上の論は堂々たるもので、並外れたものではあるけれども、われわれの他の考え、すなわち、万物を一から導き出すという考えや、原因づけられたものには、つねに原因の痕跡——外から臨在するのみならず、それに加えて、本質的に結びつく——が内在しているとみなす考えと一致しない。じっさい、たとえ太陽の光は分有に対して共通であるとしても、太陽に似た何らかの輝きが眼のうちにも共通ではなく、すでに固有なものとしてあるのである。そして、その固有のものによって、共通なものとなわれわれは結びつくのである。プラトン自身も、魂そのものに眼光のようなものがあり、それを上方に向けて真理の光に結びつかなければならないと言っている。さらにまた、彼が真理と呼んだ、ある種の依然として共通な分有が、万物の一なる始原から流れ出ると語っている。それは太陽ではなく、太陽の光に類比的なものである。

しかし、おそらくプラトンは以上のことについて、大衆を恐れて厳密な探求を沈黙に付したのであろう。多数化の原因を同一視しつつも、多を一から区別する余地を残しておいた。だが、われわれの目下の議論は、しかるべく、プラトンもそう名づけた一なる始原と、多数化の原因を別々に眺めるのである。しかし、プラトンが意図的にそのような区別をしなかったということは、多数化の原因を混合体の前に置くことすらしなかったということから明らかである。混合体に多数の構成要素を認めて、一つの始原の代わりに三つの始原を仮定したけれども、われわれがいま語っている一なる始原すら、おそらくその箇所で明示せず、それにしたがって[R71]混合体が生ずる、二つの始原の後なる始原を明示したのであるから。じっさい、混合体もまた一であり、しかも三つの単子はこれの分割なのであって、真に第一の始原の分割ではない。この点については、必要とあらば、またの機会に論ずることとしよう。

われわれの概念は、第一の諸始原を厳密に分節化していないので、統

一と分離の原因を端的に同一のものと仮定している。それは、分離する原因——まず自己を一から分離し、次に他のものどもにとっても分離の原因となる——が、未分のまま保持する原因と異なることを無視するからである。一はたとえ万物の原因だとしても、万物を一にする、否、そうもしないのである。というのは、活動すらしなからである。なぜなら、活動は活動するものから、何らかのしかたで分離されるからである。じっさい、力もないのである。というのも確かに力は、そう言われるように、実体の延長であるが、一は実体であることすら欲しないのであるから。じっさい、混合体における実体は三番目である。私が言うのは、単一的なものにおける単一的な実体のことである。だが、このことに関しては、また後に論ずることにしよう。

いま私が主張していることは次のことである。すなわち、一なる始原は分離することどころか、統一化することさえなく(というのも、何かをなすことすらしないからである。じっさい、分離することと同様、統一化することも或る一つのことだからである)、個々のものを“一・万物”にする。個々のものを対象にそうするのでさえない。むしろ、個々のものには、多数化し分離する原因が属し、一なる始原は個々のものに先行するものを、いわば“万物・一”にするのである。というのも、本当は万物でさえないからである。なぜなら、全体が分離のうちにあるのだから、万物も分離のうちにあるからである。ところが、一が万物であるのは、万物を超えた一に即してであり、これに即して万物が一となる。しかし、もしそうであるならば、これはかの一の後の第二のものになるだろう。すると、何が原因から原因づけられたものを分離するのであろうかという問いに再び戻ることになる。じっさい、おそらく万物に共通な分有される一は、分離する原因から発出するのであろう。というのは、この一も多だからである。じっさい、共通なものはすべて、数のうえではないとしても、本性上多なのである。それゆえ、何であれ分離する原因そのものが、おそらくかの不可視の完全に不可分な原因から、まずは自己自

身を導出し、次に、第一の不可分の分離の後というかぎりで共通の {一} を他のものどもへも伝達したのであろう。

## [6. 区別の原因の区分に関連したアポリア]

しかし、分離する原因そのものが一なる原因といかなる関係にあるのかを探求しなければならない。じっさい、それは自らを一から分離することができるのだとしておこう。とはいえ、そうしたら、かのものはいかなるものの原因でもなくなるだろう。というのは一なる原因は、それ自身の後で他のものどもに先立って存立したものの原因ですらないことになるからである。しかしそれでも、この通りだとしておこう。だが、分離する原因は一なる原因といかなる関係にあるのか。分離する原因は、かの原因を何がしか分有するのであろうか、それとも、いかなる点でも分有しないのであろうか。じっさい、もし後者 [R72] であれば、分離する原因は一なる原因から引き裂かれた状態になり、第一の始原が二つになるだろう。否むしろ、万物を分離する始原一つになるだろう。また、分離する始原に先立つものは、万物から引き離されことになる。他方、分有するのであれば、かの地から何かが到来することになるだろう。して、何が分離したのであろうか。たぶん第二のものが自らを分離したように、分有されるものから己固有の分有もまた分離したのであろう。しかし、そうであれば、われわれは問題となっていること、すなわち、一の本性—— {他ならぬ} 一の本性であり、一であるのに——が何らかの分離を受け容れることを承認済みととることにならないだろうか。それとも、そこへと発出した第二のものから何かを被り、もはや混じりけのない一としてはとどまらないのであろうか。じっさい、多における一となって、多を被ったのであり、{自らを} 受け容れることになるであろうものと同時に何らかの点で変化したのである。このように第二のものが分有したならば、引き続くものどもも同様のしかたで、この第二のものによって、第二のものを通じて、一なる原因を分有するのである。

しかし、もし一が与えないならば、第二のもの、あるいは第三のものは、いかにして受けとるのであろうか。万物のいかなるものをも導き出さないにもかかわらず、いかにして原因でありうるのであろうか。{一は}何も勞せずとも、存在のみによって導き出すことができるように、一によってもまた派生物を導き出すことができる。というのはじっさい、存在とは実体の活動を活動することである。まさにそれゆえに、かのものは一によって活動するのである。しかしまた、導き出すことも活動である。したがって、かのものは本性上ただ一であることによって、こう言ってよければ、他のものどもが自らによって導き出されるのである。じっさい、それらが自らをすっかり導き出すことができるのは、一があるからである。まさにこの一を呼吸し、この一に根づくことによって自己自身を導き出すことができるようになるのである。

しかし、われわれはぐるりとたいそう遠回りをした挙句、何かがかのところから他のものどもに来るのかどうか、そして、かのものの分有によって各々のものがあり、また自己を導き出すのかどうかといった、いまだ同じアポリアに縛られたままである。というのは、もし他のものどもが一の何ものをも享受しないのであれば、自分固有の存立のために、どうして一を必要とするであろうか。そして、一般的に言えば、われわれがかの共通の始原から何を得るのか知りたいと願っているのである。たとえそれが最初の始原であっても、他のものどもから裸の“万物・一”である、われわれが質料と呼ぶような何か最後の痕跡をももっているのである。もし最後のものも第一のものも、一以外の何ものでもないようなものであれば、そしてそれは万物であり、万物に先立つのであれば、諸々の中間の充溢体にもこのような本性が見出されることは確かである。

### [7. 一の絶対的無規定性]

さて、われわれの眼前に提示されたアポリアは以上のようなものなので、ここでも神を救い手として呼び求めつつ、始めから論点を再び

[R73] 取り上げて論じてゆくことにしよう。そこで、かの一は万物なので、つまり、一であるのみならず、最も単純なものに即して万物であるので（そして、この単純性は万物の溶解であり、万物に先立つ単純性である）、統一化するものではない。というのも、統一化するものは区分に関わるからである。また、同じ理由で、多数化するものでも、他のものどもの個別的特性をつくるものでもなく、端的に共通なものをつくり出す原因、全体的なものをつくり出す原因である。統一化されたものですらつくり出さないのであるから、区分された万物を同時につくり出すことはない（じっさい、区分されたものにも統一化されたものにも、同じ原因があり、それは両者に先立つからである）。したがって、かの一は何か統一化されたものも区分されたものも導出することがなく、あらゆるしかたで存立した万物の端的な原因である。したがって、かの一の本性は、万物のいかなるものからも区別されていないし、いかなるものとも結びついていないし、いかなるものとも同時に変化することがない。というのは、もしそうであったら、もはや万物ではないことになり、規定を同時にされたものになってしまうであろうから。そして、それは固有なものとはならず、固有性を拒否するのである。したがって何か、かの一の本性から個々のものへと固有なしかたで分割されることはないし、いかなるしかたでも分割されることはない。

しかし、おそらく万物に共通で一つの分有が、かの一から万物に発出するのであろう。すると、その分有は原初的な存在から区別される。だが、原因にせよ、原初的な存在にせよ、分有にせよ、いかなるものにも区別がまだない。したがって、何ものもかの一から発出しないのである。発出するために、そのうちで滞留すらしていないのであるから。というのも、滞留はつねにあらゆる発出に先立つからである。その差異なき本性には、いまだ差異あるものどもがないのである。したがって、万物はその本性を分有しないのではないか。疑いなく分有する、と私は主張しよう。では、それは何かを万物に与えるのか、何も与えないのか。疑いなく万物

で最も価値あるもの、すなわち、原初的存在における自己自身全体を与えるのであって、決して自己からの分有を与えるのではないと私は主張しよう。すると、その本性は、受けとることになるものに属すことになり、自己自身に属すものではなくなってしまうだろう。否、その本性は自己自身に属すのでもなければ、受けとるものどもに属すのでもなく、超越してもいなければ、連携してもいない。原初的存在に即してあるわけでもなく、分有に即してあるわけでもないからである。というのも、こういったことすべては、区分に関わるからである。だが、かの本性は全面的に不可分であり、万物に属するのでもなければ、いかなるものに属するのでもない。じっさい、真実のところ [R74]、万物のうちにもなければ、万物に先立つのでもないのである。というのは、この種のことでも、何らかの区分けだからである。だが、かの一は単純かつ不可分で、まさにそれこそ“万物・一”なのである。じっさいわれわれは、それをただ一つのかたちに名づけることができないからである。というのは、一も万物から異なり、万物も一から異なるからである。それゆえに、かの一をめぐって、かの一の後に、他のものどもはかの一から遠く離れた諸原因のうちで、あらゆる種類の区分を作り出すのである。したがって、かの一自身は分有されるものでもなければ、分有されないものでもなく、むしろ、これら両者に先立つしかたで存在し、他のものどもを保持し完成させ、全体的なものをつくり出す自らの一なる活動によって、万物を同時に導き出すのである。じつに、この活動を「導出するもの」とも、「完成させるもの」とも、こういった類のいかなるものとも呼ぶべきではない。というのも、これらは区分に関わるが、かの一は一なる本性にしたがって全体を産み出すものだからである。それゆえ、万物はかの一に吊り下っていて、そのようなしかたで、かの一に所有され、かの一を享受しているのである。では、かの一からはそれと似たものは何も出てこないのであろうか。決して出てこない。じっさい、乖離させるものとして他のいかなるものも現れない状態で、かの一自身が自己自身から乖離

して減退することすらありえなかったからである。差異なき本性が自己自身に対して何らかの差異ある状態になることも、万物の単純性が何らかの二重性へと発出することもまた許されることではなかった。

さて、どのようにして質料はかの本性の限界、最後の痕跡なのであるうか。否、そうではない。というのも、かの一は、われわれが質料がそうだというような一として限定されてもいないし、かのものには最初も中間も最後もない（これらもまた区分であるから）し、可能態においてとか現実態においてあるということもなく、一般的に言って、質料に特徴的なことの何一つもないからである。というのはじっさい、質料自体は生成したものの構成要素の何か一つなので、規定されているからである。したがって、無限定の本性からは遠く離れている。どこか生成が始まるころから、己固有の特性を始めるからである。そしてもちろん、質料はこの始原の諸々の第一の所産のうちにあるのでもなければ、中間の所産のうちにあるのでもなく、末端の衍のうちにある。それゆえ、万物がかの本性をめぐる規定される。そして、万物の最後の規定は、万物の後に万物の真の土台を分離する。

それはそうと、質料についてはまた別の機会に語るができるであろう。そして、アポリアを抱いた後に、適切なときにアポリアを解くことができるであろう。だが今のところは、次のことを付け加えておくにとどめよう。すなわち、懸案の始原は、全き単純性を呈する自らの差異なき囲いのうちに、末端にまで流れゆく質料をも包括したのである。

## [8. 一における無規定性と原因性]

[R75] そこで、もしかの一から何ものも到来しないのであれば、かの一はいかにして原因なのであるうか。それは限定された原因という意味での原因でもなければ、原因ということで考えられる決まった概念に対応した原因でもない。というのも、それは作出的原因でもなければ（というのは、これに先立って他の諸原因があるのだから）、範型的原因でもな

く（というのは、この原因をも他の原因が先導するのだから）、或る人は考えるかもしれないが、目的因そのものでもない（この原因もまた、他の諸原因のうちの一つであり、他の諸原因から限定されているからである）。しかし、かのものは諸原因の原因でもあるかぎり、万物に先立ち、万物の原因である。否、一なる単純性と異なるものとなるのであれば、万物の原因ですらない。しかしかのものは、下方のものどもから見ると一であるように、確かに原因でもあるのだ。

して、いやしくもそもそも原因であるならば、それは何の原因なのであろうか。万物の原因であると私は主張しよう。それは、或るものどもの原因ではあるが、別のものどもの原因ではないというのではなく、また、或る点では原因であるが、或る点では原因ではないというのでもなく、かのものその後でわれわれが区分する、以上のような限定においての原因でもない。では、かのものから何かが到来するのであろうか。もちろん、万物が到来する。しかし、かのもののような万物がではなく、かの本性の後の万物が到来するのである。

すると、かの一からの産出は異種のものであることになるが、異種の産出に先立って同種の産出があることになる。なぜならこれは、より同属のものどもの産出だからであり、異種の産出のように全体的なものそれぞれのうちで区分された諸原因のいずれかからではなく、全体的なものそれぞれから発出するものどもの産出だからである。そしてさらに、{同種の産出は} あらゆる神々に最も共通なものである。というのも、あたかも神々のうちでも或るものは乙女とか、未婚のおのことか言われるように、異種の産出はあらゆる神々に最も共通なものではないからである。他方、同種の産出は至るところにあり、同種の産出を行なわないものは不毛であるが、いやしくも可能性があるとするれば、これは質料に関してのみ真実である。したがって、かの一からの万物の発出が異種のものであるならば、同種の発出がまた先行すること必然であるが、まさにこれは不可能であると示された。こうではないか。第一に、かの一につ

いて、二つの発出を区分することは許されない。というのも、かの一は完全に不可分なので、自己からの産出を、同種のものにせよ、〈異種のものにせよ、〉二種同時にせよ、区分されたものとするとはできないであろうから。むしろ、かの一にふさわしい産出は、こう言ってよければ、同種・異種に先立つ無限定の産出である。第二に、もし人が限定された概念に甘んじようというのであれば、それからの万物の発出は、同時に〔同種・異種の〕両者であるとも考えることもできるだろう。じっさい、かの一が一に即した万物であるかぎり、同種的に万物を導き出し、他方、万物に先立つかぎり、万物を異種的に導き出す。かの一は同一のものとして同時に万物であり、かつ万物に先立つ。したがってそれは、同一の発出を同時に同種であるとともに異種のものにするのである。じっさい、かの一は万物であって、万物を導出するのであり、[R76]これが同種的ということである。他方、異種的ということのは、それが万物に先立って、万物を導き出すものであるということなのである。また、別のしかたでは、全面的に単純なものとして、全面的に単純ならざるものどもを異種的に導き出し、超単純なものとして、同じく単純ならざるものどもを同種的に導き出すのである。

それでは、いったい導き出すのであろうか。というのも、その場合それは活動することになるからである。ところで、活動の前には力があり、力の前には原初的存在がある。おそらく……、ましてや力はないし、いわんや活動はない。というのはじっさい、これらは区分に関わり、何らかのしかたでお互いから分離されている。したがって、存在すること、力あること、活動することは、全面的に不可分なものには適合しない。それとも、これらはわれわれが述べるようなしかたでは、かの一に属さないが、一がかの一に属さないにもかかわらず、すでにしばしば述べられたような理由で、われわれは一をかの一に上昇させるし、また万物も〔かの一に属さないのに〕一に結び合わせるのと同様に、われわれはかの一について、活動すること、力あること、存在することを、お互いに不

可分なこれら三つが一つであるかのように語ることができよう。じっさい、或る人は言うかもしれないが、それは在ることによって作り出すのではないし(なぜなら、これは他の諸々の制作と対になって限定される一つの制作であるから)、また、かの一があるゆえに、他のものどもがあるのでなく(なぜならこの場合、もしかの一がそれらを導き出さないのであれば、いかなるものの原因ともならないであろうから)、活動・力・原初的存在に先立つ、万物を産出する単純性に即して万物の原因なのである。

しかし要するに、それは原因なのであろうか。また、原因づけられたものどもから区別されているのであろうか。こうではないか。原因も原因づけられたものも、区分けする原因——これが何であれ——から区分されるのは、かのものの後のことである。ところで、かの一は、たんに“一・万物”である。だが、それが原因でもあるのならば、原因が万物のうちにあるかぎりでのことである。すると、それも万物のうちに包括されているかのように、己から原因づけられた万物にもなる。だが、かの一は原因として先立つのもなく、原因づけられたものどもに対して先立つのもなく、“一・万物”が万物に対するように、端的かつ無限定なしかたで先立つのである。

### [9. 対置のアポリア]

では、このようなしかたでも、かの一はそのようなものとして、そうでないものどもから少なくとも区別されたのではないか。しかし、かの一から、かの一に続くものどもが区別されたとしても、区別はそれに由来するのではなく、発出したものどもが自己自身をかの一から区別したのである。これは、ちょうど眼を閉じた人が、太陽は離れないのに、自己自身を太陽から引き離してしまうのと同様である。しかし、かのものでないとすると、何が分離の原因なのであろうか。というのは確かに、万物が離れたとしても、万物はその原因ではないからである。かのもの

から発出したものどものうちの何かではないか。それは、論が進めば明らかになるものではないか。そうすると、そのものが第一に自らをかの一から分離し、次に他のものどもを分離したことになる。そこで、それが第一に自己自身によって自己を分離し、自己から己固有の活動を始めたものであるとしておこう。それでも、分離するのであるが、[R77]少なくとも分離するものは「他の」分離するものから分離することは明らかである。否、これが必然ではない。というのもじっさい、太陽は離れず、太陽「の光」が反射していても、われわれは眼を閉じれば太陽から離れるからである。また、神は至るところにあるのに、われわれの方の適性のなさゆえに、その生命から離れるのである。そして、質料は区分をもっていないのに、質料から形相は分離されている。というのは、区分もまた或る形相だからである。また、質料の方で異なることはないのに、形相は質料とは異なると言われる。似像もまた、自らの似像と似ていない範型と似ている。否、こういったことは確かな主張ではないのではないか。というのも、似像の類似性が範型に劣っている度合いと等しく、範型の類似性は似像に優っているからである。だから、同階層のものどもの類似性は対等に転換されるが、優れたものと劣ったものの類似性は、転換されることはされるが、超過と不足を伴ってのことである。それゆえ、似像が範型に同程度ではなく不足して似ていたならば、範型の方でも超過して似像に似ていることを妨げるものが何かあろうか。そして、似像は範型に同化することによって似ているのであれば、範型の方も似像を自己へと同化させることによって似ているのである。しかし、この種のことは別の議論構成に属することであろうが、ともかく、質料は異なるのであるから、形相の方でも質料と異なることはなく、形相はたんに質料ではないということなのである。というのはじっさい、他性は同一性を区分することができるからである。だが、他性もない<sup>(8)</sup>。形相と質料はいかなる点でも同一ではない。なぜなら、質料は同一とはなりえないからである。したがって、それらのうちにお互いに対する他性は

存在しない。質料と形相はお互いから分離していると言うべきである。分離しているものは、分離しているものと転換する。したがって万物もまた、かの分離している一なる本性から分離している。それゆえ、かの一なる本性も万物から分離されている。それならば、いかにしてかの本性は分離を被ったのであろうか。というのも確かに、これこそ分離する原因であるとわれわれが言う、自己の後なるものどもの何かからではないからである。いかにして、全面的に不可分であるとわれわれが同意しているものが、その分離した当のものから分離したのであろうか。こうではないか。そのうちに共通の他性がない両者は異なると言うべきではないのと同様に、そのうちに共通の实在も名前もなく、共通の分離も区分もないものどもは、お互いに区分されても分離されてもいない。というのは、少なくとも区分ないしは分離する原因は、自己によって原因づけられたものと転換するが、同等ではなく、生じたものに対するつくるもの関係のようである。というのも、原因づけられたものは区別する原因を分有するものとして、原因から区別されるが[R78]、他方原因も、原因づけられたものを自己自身から導出し区別するものとして、原因づけられたものから何らかのしかたで区別されるからである。じっさい、似像と範型の類似性もこのように転換するとわれわれはみなしたのである。しかし、あらゆる区分の彼方にあるものが区分されているとは、いかなる点でも、いかなるしかたでも人は言うことはできないであろう。というのは、区分されている〈ものども〉も、全面的に区分されているのではなく、何がしか共通の一をもっているからである。したがって、第二のものには、第一のものに由来し第一のものに似たものがあることになるが、これはわれわれが拒否したことである。しかし、もし第一のもの自身が、すでにわれわれが述べたように、第二のものにも万

---

(8) リュエル版にしたがって、οὐδὲ δὲはA写本通り οὐδὲと読み、ピュテ版の〈καὶ ταύτοτης〉の補足は採用しない。

物にもあるとすれば、それは共通かつ区別されているものとはなりえないであろう。というのもじっさい、こういった共通であるとか、固有であるということは、何らかの区分に関わるからである。

## [10. 一の力]

それでは、いかに語るべきであろうか。また、この並外れた真理の単純で、まこと揺るぎなき現われをどのように配すべきだろうか。というのも、かのもの後には何もなく、かのものだけがあるか、それとも、かのもの後に他のものどももあって、それゆえ必然的に、それらはかのものに対して〈何らか〉区別された関係にあるかのいずれかである。こうではないか。このことも下位のものどもから把握するならば、かのものへの永遠の情熱、いつになっても産むことができないが、いかなるしかたであれ陣痛のうちにあることが産むことに等しいような陣痛をおぼろげなりとも示すために、さて、この陣痛を示すために、何らかのしかたで最も曖昧にして最も不明瞭な付加限定がなされるとしてみよう。私が言っているのは、あらゆる付加限定のうちで最初のもの、不可分なものによってほとんど飲み込まれたものことであり、その結果、第二のものは第一のものの力、原初的存在に差し込まれた力——聖なる書の著者たちがすでに語ったように——であるようにみえるのである。それとも、あらゆる原初的存在と力に本来先立ってあるものどものうちに、これ以上に何か一なる姿をしたものを人が考えることができるのであれば、それでも構わないのであるが。そして、第二のものはかのもの後にある、否、かのもの後にあるというよりも、かのものであると言うことにしよう。また、かのものに由来するというよりも、かのものそのものであると言おう。そして、人は見出しうるこの種の誇張表現を語るがよい。

### [11. 区別されたものどもと一]

それでは、第二のものの後の他のものどもも、万物の末端のものどもも含め、同様のしかたで、かの一に臨在するのであろうか。そして、万物がかのものに対して、同じ特権をもつのであろうか。否、これは不合理である。したがって、たとえかの一が第二のものから区分されていないとしても、少なくとも他のものどもからは十分に区分されており、とりわけ末端のものどもからは区分されている。こうではないか。万物は第一のものども・中間のものども・末端のものどもも同時に発出し [R79]、未だお互いに対してこのような関係にはなく、万物が同時に一としてあるが、万物は“一・万物”に対して、原因づけられたものの原因に対する関係にある。他の発出と秩序は、他の諸原因から万物に到来するが、これら諸原因もかの一に由来する。もっとも、これら諸原因が万物のうちに含まれるかぎりにおいてである。それゆえに、かのものだけが万物の原因であるが、これら万物のうちの或るものは他のものの原因である。かのものが全体として捉えられた万物の始原であることを明らかにするのは、まず始原の包括性であり、次に不可分さであり——というのも、これの始原よりむしろその始原であるということがないからである——、さらに、万物であるかぎりの万物のこのような原因への希求である。というのもじっさい、或る一つのもの先行原因はあるが、一括して捉えた万物であるかぎりの万物の原因はないということはないからである。もしそういう原因があるならば、目下主題の原因以外の何であろうか。その原因は万物と次の点で異なるのではないか、すなわち、こう言ってよければ、万物はあらゆるしかたで万物であるが、その原因は最も単純なしかたで万物である。

以上のことはイアンプリコスの見解とも一致しうる。その証拠として、もしかのもが自らを万物と連携させなかったならば、また、万物に共通な始原へと万物とともに駆け上らなかつたならば、かのものへの上昇

すら個々のものにとって到達不可能であるとのかれの言を私は引き合いに出そう。それゆえ、もし万物が同時にかの始原へと高揚する本性にないのであれば、また、個々のものはそれ自身、他のものどもから離れてそれだけではありえない本性なのであれば、万物が同時にかの地から発出したこと、そして、個々のものがそれ自身だけではなく、或るものは別のものから発出したということは誰にとっても明らかである。しかし、たとえ万物が同時に発出したとしても、或るものどもはより遠くに発出し、或るものどもはより近くに発出した。しかし、こういったこともかの本性の後に区別されたのであって、そのときにはまだ、より遠くもより近くもなかったのである。

さて、下方のものどもから最も上方のものどもについて述べ立てるならば、このように人は言うことができるであろう。他方、より真なる陣痛にしたがって述べるならば、下方のものどもはかのものから区別されてもいなし、かのものが下方のものどもから区別されていることもない。かといって、それらがお互いに統一化されているということもなく、同一でも異なるのでもなく、似ているのでも似ていないのでもなく、一でも多でもなく、同階層でも異階層でもない。というのは、万物に先立つということも、かのものには適合しないから、万物の方にも、かのもの後ということが適合しないからである。それゆえ、第一のもの、第二のもの、原因、原因づけられたものということもない。なぜなら、こういったことは、お互いに対する何らかの区別に関係するからである。ところが、かのものは、区分されたものと対立したものという意味ではなしに不可分であり、全面的に単純であり、かつ区分なきしかたで万物である。というのは、それは一に即した万物、すなわち、一のみならず万物でもあるような、かの一だからである。

## [12. 単一的発出・産出・分有]

そこで、人は次のようなアポリアを出すことのないように。もし他の

ものどもがかの一から発出するのであれば、それらはかの一から切り離されたのであるから[R80]、かの一もそれらから切り離されたことになる。逆に、もしそれらが|かの一と|一体化していたのであれば、発出しなかったのである。というのもそれらは、われわれが考えるようには、発出したのでも、発出しなかったのでもないからであり(じっさい、その単一的発出のしかたは異なるのであって、それをわれわれはまだじっくり考えてはいない。われわれは滞留・発出・還帰へと分割されているのに、その発出のしかたはこのようなものの区分を超えているからである)、区分されていないからといって、|かの一と|一体化していることも必然ではなく、一体化していないからといって、区分されていることも必然ではないからである。じっさい、かの一は二者択一に先立って不可分なのであり、他のものどもは対立しているものなのである。

また、一が導出し、他のものどもは導出されるのかと人は問うことなきように。というのも、もし活動するならば、力があることになり、存在することになるからである。そうして、万物は一ではなく、原初的存在・力・活動の三つになる。しかるに、かの一は活動にも力にも原初的存在にも先立つとすでに言われたのである(じっさい、それは三ではなく一であり、三も含めて他のものどもに先立つのである)。それにもかかわらず、われわれがそれは導出すると述べるのは、思考力不足で、舌足らずだからである。だが、われわれに馴染みなき、その導出のしかたを徹底的に洗い出すべきである。すなわち、活動することによっても、力あることによっても、存在することによっても遂行されず、三に先立つ一によって、語りえぬしかたで遂行されるからである。

また、人が次のように言うことなきように。かの一から何らかの分有——個々のものに固有のものになるにせよ、万物に共通な一つのものにせよ——が流出し、その結果、かの一から発出したものは、かの一を分有し、かの一の方でもまた、発出したものに自己自身から何かを与えることになる。さもなくば、発出したものどもは、かの地から存在を受

けとることもなく、それらにかのものと共通のいかなるものもないことになる。というのも、もし何か共通であるならば、かのものがそれらのうちにあることになり、かのものがそれ自身だけであることがなくなるか、それらがかのもののうちにあることになり、かのもの自身以外の何ものもないことになるからである。じっさい、この種のアポリアが効力をもつのは、分離によって導出するものや発出するものに関してであると言うべきである。かのものに由来するものどもが、かのものから発出するのは、統一に即してでも分離に即してでもないとわれわれが断定したように、かの地からの完成やかのものへの分有は、かのものが何かを自己自身から与えるからでもなく、贈与を控えるからでもなく、他のものどもと何か共通のもの——与えられる照明そのもの——をもっているからでもなく、全面的に隔離されていて、いかなる点でも他のものどもと共有関係にないからでもない。というのも、すべてこういった対立は区別に関わるからである。ところが、すでにしばしば述べられたように、かの一は不可分なので、これらすべてがかのもののうちに同時にあると言うべきなのである。だがまた、{かの一のうちでは} いかなるものもそれ自身単独では区分されていない。否、より正しい言い方をすれば、万物ですらなく、これらすべてを同時に単純化する、万物に先行する一である [R81]。

### [13. 分有されざる一と派生するもの]

それでは、プラトンの言う、かの一から送り出される真理の光とは何であろうか。われわれの諸概念に比較的近いかたちで、このようなことをプラトンが言明したのは、かの一についてであるということは、真理のみならず、美と均整もその戸口に置くべきだと他の箇所でもみなしていることから明らかである。しかし次に、プラトンは必ずしも万物に先行するかのものではなく、存在者が密接に依存しているものを取り上げたのである。それゆえ、この光は可知的なものの中に位置を占め、

直知するものと直知されるものに真理を同時に与えるかぎり、認識されるものと認識するもの、すなわち可知的なものと知性的なものを結びつけるものであるとプラトンは述べるのである。しかし、この件については、またの機会に考察すべきである。

そこで、もし真理はまたかのももの光だとわれわれが言うのであれば、哲学者たちにとってそう思われたように、かのもものに由来する輝きは、神的な単一子の発出であるとわれわれは言うことになるだろう。では、これらの単一子は相互に何か共通のものをもっていて、それにしたがってすべての神々が一なる神であり、またそう語られもするのであろうか。もちろんそのとおりだ、と私は主張しよう。だが、それはすべての神々が一に由来し、一に帰着するかぎりにおいてであって、その結果、この一も多になるのか、それとも、多なる神々の一なる根のごとき、何か不可分な一というのもあって、この根はかの一と似ていることも、かの一の分有でも決してなく、もしこう言って許されるなら、神的な数の単子のようなものとして、発出するものどもとともに発出する、発出するものどもの根なのであるかのどちらかである。

かのももの何か最後の痕跡であるとして、質料というものをまた人が引き合いに出すならば、まるで正鵠を射ていないだろう。というのも、質料は形相と相関的に、最後のものは第一のものと相関的に限定されるのであるが、かのももの本性はこれらに先立つからである。そして一般的に言って、至るところで質料には形相が共存している。それゆえに、形相が発出するのと同じ階層から質料も発出するのである。しかし、この件については、後にも触れることにしよう。

以前に提示された諸々のアポリアに続いて述べられたこと、すなわち、それぞれのものうちにある万物に先立つ、それぞれのものうちなる万物の圧縮体は、確かにかのももの影像のようなものでもなければ、また光のようなものでもない。これはまた、むしろ発出したものの頂点であり、根である。ところで、これら頂点や根もまた、かのもものからの

{発出に} 本来的なしかたで、発出したものとともに発出したのである。それは、万物に共通な一なる根と同様である。だが、かの一は根ではなく、万物に先行しているのであった。また、根のみならず、根とともに万物であった。それゆえ、かのもの自身は“一・万物”であり、万物に先行する一方、万物の方は同時に根かつ枝として、かのものから発出する。それでは、どうして {問題の} 根は、一つであれ多であれ、万物に先立つ不可分な“一・万物”であると同意することによって、同時に根 [R82] かつ枝であるとわれわれが同意した、かのものでありえようか。ところで、根は枝と相関的に限定され、頂点は他の一切と相関的に限定される。したがって、かの地からの照明は、個々のもののうちにある多数化されたもの一切に先立つ一なる姿のものではなかったということになる。というのも、その一なる姿はともかくも連携によって何らかのしかたで多数化され、照明するものからは何らかの点で区別されるであろうから。

しかし確かに、他のものどもがかの一にそのようなしかたで与らないからといって、いかなるしかたでも与ることがないだろうとか、われわれがかのものを万物から隔離されたものとして措定することにはならないだろう。というのは、端的に妥当するわけではないが、他のものどもによくある分有のしかたに矛を向ける、第二の諸々のアポリアを退けねばならないからである。じっさい、かの一の存立には独特の想定をしたのと同様に、発出に関しても、一体であるのでも分離によるのでもなく、類似のものでも不類似のものでもなく、両者に先立つのだとしよう。また分有に関しても同様に、かの一の臨在によって生ずるのでもなく、かの一から切り離された照明によるのでもなく、両者に先立つのであるとしよう。それゆえ、与えられるものが共通であるとか、固有であるとか言うことは適切ではない。なぜなら、この与えられるものも両者の彼方にあるからである。また確かに、それが与えられるとか、逆に与えられないとか言うことすら適切ではない。というのは、これらもまた何らか

のしかたで対立しているからである。ところが、かの一はあらゆる対立の彼方にある。矛盾する対立の彼方にさえあるのだから、いわんや他の一切の対立の彼方にある。したがって、可滅的でもなければ不滅でもなく、いやしくも、かの一に固有の命名が何かあるとすれば、これらに先立つ命名がふさわしい。だが、固有なものも共通なものも属さないものに対して、どうしてそれが可能であろうか。それゆえわれわれは、固有性が備わっていない、かの一にいかなるしかたでも類似することはない。固有性はむしろ、かの一より後のものどものうちの何かに備わるのである。というのも、われわれはかの一と一体化することすらないのであって、その後の一と一体化するのだからである。だがかの一は、一に加えて万物であった、こう言ってよければ、一と万物に先立つものであった。

それでは、「魂の眼光」とは、プラトンにとってどういう意味をもつのであろうか。これはかのもに由来する光とは結合するが、かのもには結合しない。だが、かのもに由来する光は、かのもと結合していなかったのか。こうではないか。その光は類比関係の似像として結合していたが、真実に[R83]結合したというわけではない。というのも、かのもは他のものとの結合を甘受しないからである。点ですら、他のものとの結合を甘受しないのであったのだから。しかし、どうして一の後に直ちに光が生ずるのであろうか。その光が他のものどもに先駆けて第一に顕れたからか、不可侵の聖域から完全には身を乗り出さなかったからではないか。して、プラトンによって語られたことに関しては、まとめて後回しにしよう。

さらに、かのももの後の第二のものは、それが何であれ、かのもものに由来するかぎりにおいては、区分との対立なしに、全面的に不可分なしかたで万物とともに発出する。他方、それ自身がまた第二の始原であるかぎり、自己自身と自己に由来するものどもについて他の諸概念をわれわれに投げかけることであろう。じっさい明らかに、われわれの概念を

事物にできるかぎり似せるべきだからである。というのも確かに、われわれの行った諸々の推測は、万物に先立つ一の単純性から引き出そうと試みたものだからである。たとえわれわれの衝動は、本性上分裂した諸概念を反対方向へと覚醒しようと努めたのだとしても。否むしろ、われわれの分散した推測を、全面的な一にして、優らずとも一であることに劣らず自らのうちに万物を包括した、あるいはよりよい表現では、万物であるものに、おそらくさらによりよい表現では、万物であるのでもなく、それを越えた“万物・一”に、適合させようとわれわれは意気込んだのである。それゆえまた、大いなる騒乱が生じたのである。分割をこととする言論は、一を多へ分散させるか、その固有の本性・力・活動をすっかり破壊する危険をつねにもっているからである。

#### [14. 一に関する結論]

まさにそういう理由で、次にこともこれらの帰結としてわれわれは結論するのである。すなわち、かのものは区分に関わると言われる以上のいかなるものとも同一視すべきではないし、たとえば、万物の原因である、第一のものである、善である、最も単純なものである、存在者の彼方のものである、尺度である、希求されるものである、終局目的である、始原であると、すべてを同時に集めて言うべきでもない。というのも、これらすべての概念は、限定されているからである。しかるに、かのものにはいかなる限定もふさわしくない。限定されているものに対立する不可分なものということさえ、ふさわしくないのであるから。しかし、万物に先立って、万物を指し示す何か一なるものがあるならば、これだけをかのものについて推測すべきである。というのも、一と万物に先立つ一として、一かつ万物の同時に両者であるのだから、全体的かつ単純な概念を固有のものとしてもってはいないし、ましてや固有な名称などもっていないからである。それにもかかわらず、かのものは、われわれが捻出するのに困るような名称を要求するのである。それゆえまた、わ

れわれはかのものについて、われわれのものであるすべては、かのものに適用するに値しないとみなす認識だけをもつのである。また、かのもの後のものどもについてわれわれが措定するものも、われわれは不適合だとする。そして、かものはこれらすべてのうちの何かでもなければ、すべて併せたものでもないといわれわれは考える。というのも、かものは万物の原因であり [R84]、全面的に単純であるとわれわれはみなすからである。それは、万物のうちの何かのようなしかたで単純なのではなく、単純性自体のようなしかたで単純であるのでもない（なぜなら、これもまた万物のうちの何かであるから）、同時に万物であるようなしかたで単純なのであり、同時に単純であるようなしかたで万物なのである。また逆に、万物が万物であるようなしかたで万物であるのではなく、全体が多から構成されるようなしかたで万物なのでもなく、かものは万物に先立つ一として万物なのである。

しかし、かものはこのようなものとして明らかになったのであるから、その後に発出したものについて、それが何であれ、引き続き探求すべきであろう。確かに、この件についてわれわれは後に取り扱うことになる。だが、それがかのものに由来し、かのもの後であるという点だけからも、まず、第二のものがかのものから区別されたのかどうか、次に、第二のものは発出するのに、かのものは留まっているのか、さらに、第二のものは留まりつつ発出するのか（というのも、進むものに先立って、滞留しているものがつねになければならないからである）、ひたすら発出するだけなのかを探求しなければならない。最初から始めることにしよう。

そこで、もし第二のものが第一のものから分離したのであれば、第一のものも第二のものから分離したのであること必然である。というのも、分離するものは分離するものから分離するからである。しかし、もしそうだとすると、第一のものの自身が分離を被ったのは、自らを分離した第二のものからであるのか（して、どうして原因が原因づけられたものから

変化を受けたり、何であれ影響を被ったりするであろうか)、あるいは自分自身からこういったことを被ったのであり、第二のものを自己自身から分離するとき、かのものは自己から自己を分離するのであろう。して、統一化するものですらないとわれわれがみなすものが、いかにして分離することができようか。一般的に言って、そもそも万物のいかなるものとの合一も分離も甘受しないものが、いかにして第二のものから分離したり、あるいはまた、それと一体化したりすることができようか。

しかし、もし分離しなかったのであれば、いかにして一方が原因であり、他方が原因づけられたものであることができるのであろうか。産み出されるものが、産み出すものと全面的に区別がつかないのが当然ではないか。そこでより着実な言い方をすれば、第一のものは一の彼方、かつ多の彼方なのだから、以前に述べられたように異質なしかたで、一体性も分離もなく万物を導き出すのであり、またそのような異質なしかたで万物から離存し、万物に内在しているのである。分離が始まるまさにその起点から、超越したものであれ連携しているものであれ、一般的に言えば、第一のものと第二のものが始まるのである。われわれがかのものどもについてこのようなことを言うときには、全面的に不可分なものどもについて何がしか示そうと意図しているだけである。したがって、第二であると思われるものをも含めて他のものどもの何ものも、かのものから分離していないし [R85]、かのものと一体になってもいない。というのは、かのものも {後のものと} 一体化することになってしまうであろうから。それゆえわれわれは、同一性も差異性も未だないことを理由に、かのものについて異なるとか同一であるとか述べることをふさわしいとはみなさないのと同様に、未だ統一も分離もないところで、一体化するものであるとか、分離するものであるとか言うことをふさわしいとはみなさない。したがって、かのものには滞留するものはないし、同じ理由で発出も還帰も区分されていないのである。

したがって、われわれは残りのものどもについてもアポリアを提示し

てもしかたないであろう。だが後に、これらのものがどこで現れるのか、かのものどもにおいて滞留するもの、発出するもの、還帰するものとは何であるのか、存立全体でこれらは同一であるのか、それとも三つの存立なのかを探求することにしよう。もし人が暗闇の中で手探りするかのよう、それでも、かのものどもにおいても、それらを表示的ではなく類比的に、つまり、表示することができる真理によるよりも優れたしかたで眺めようとするならば、かのものを滞留する原因に類比させ、かのものから第一に発出するものを、発出し、いわゆる発出を開始する原因に類比させ、かのものから第三のものを、還帰する原因に類比させるように。もしこれらそのものをわれわれが想定したように区分けするのであれば、類比がこれらに適切であると知ることになるだろう。ただし、滞留するものが、初めに“一・万物”と想定したものと異なりはしないか、すでに今から探求しなければならない。というのも、それは何も限定されていないからである。かのもの後のものは三つあるのだが、滞留するものを第一のものと人は言うことができるだろう。というのは、たとえこれらのものが完全で、各々は不可分であろうとも、すでに或るものは、よりいっそう明らかにされうるだろう。まず、滞留するものということで、次は発出するものということで、もう一つは還帰するものということで、よりいっそう明らかにされうるであろう。あるいはまた、もし人がかのものどもにおいて、これらのものを示したいと望むのであれば、滞留するものを示すためには、かの“一・万物”で充分である。かのものから発出した第一のものそれ自身は滞留せず、かのものから発出するのである一方、かのものはいかなるしかたでも発出しないからである。というのも、かの一に先立つ語りえぬものがあったのだが、それについては何も言うことができず、示すことすらできないからである。したがって、語りえぬものから何かが発出することすらない。したがって、“一・万物”が発出することすらない。だが、発出しないものは少なくともその点で、滞留すると言いうるだろう。それに由来するものさえ

滞留すると言いうるのだから、いわば類比によってそう言えるのである。だが、“一・万物”に由来するものは、“一・万物”の後にあるかぎり、“一・万物”から発出しもするので、その発出に先立って、やはり何か滞留するものを措定しなければならないだろう。いやしくも発出するものに先立って、滞留するものがあるとわれわれがみなしているのであるならば。そこで、他の「滞留する」ものを求めて、そうして無限に進むか、あるいは、“一・万物”を滞留するものとすべきかのいずれかである。これをわれわれもまた、発出するものに先立つ滞留するものと措定したのであった。というのも、もしこれが、どんなしかたであれ滞留するものどもに先立ってあるものでなければ、その後のものも [R86], どんなしかたであれ発出するものどものうちの第一のものとはならないであろうから。この件も、以上の程度まで進んだこととしておこう。

